

荒木山通信

2021年12月

第13号

北房文化遺産
保存会

どう生かす郷土の宝

案内看板十一基



「墳」や上皆部の「小田鼻古墳」は首長墳ですが、道程のことなどから今回は割愛しています。

遺跡の名前	看板の数
英賀麿寺	二基(縦型)
荒木山古墳群	三基(縦型)
立1号墳	一基(縦型)
玄寶僧都生誕地	一基(縦型)
下村1号墳	二基(縦型)
菊池家墓所	二基(縦型)
皆部教諭所跡	二基(縦型)

「全国から考古ファンを呼びたい!」という目標を掲げ、その手段として「西の明日香村・道しるべ整備事業」を令和三年度事業として取り組みました。私たちの活動に合わせて真庭市北房振興局が国指定の大谷・定古墳群をはじめ備中三名城の一つ佐井田城址(中世)、また文化財の保管展示施設である「ふるさとセンター」など、新設・更新を含め本年度十三基を整備しています。

当会が今年度整備した案内看板は次のとおり十一基で、五名の「そふづぶろ古

会では、看板設置を先行している真庭市と同様のデザインを採用しています。これらの整備により散策マップと併せて内外からの訪問者が遺跡を気軽に巡ることができるようになると考えています。

それにつけても、国指定史跡の大谷一号墳、定古墳群のみならず下村の古墳、立の古墳、荒木山の古墳な

どに大理石を組み合わせた説明板があり、その見事に驚かされます。これらの説明板は他では見られず、郷土の誇りでもありません。



会員の手で看板を設置

歩いてみよう

「山の辺の道」

国道からスーパーのマルナカと高野鉄工所の間を南に向けて進み、郡神社の前を通り中津井の街に至る通称「南部線」、続いて中津井の街を通り定地区からさらに南へ進み清常集落に在る塩川の泉の近くで国道に繋がる約五・二kmを、私たちは「山の辺の道」と呼称しています。

南部線は北房盆地の南側

山裾を巡り、北側には広く田園が開け、高速道路や民家の屋根が遠く連なって見えます。

そして山の辺の道に接した南の山裾には集落が点在し、懐かしい田舎の原風景をとどめています。

また、北房地域の七世紀を彩った中津井地域は、中津井川沿いに開けた地域で、吉備大宰の墳墓とされる大谷一号墳、五基の方墳が築かれた定古墳群など特異な地域で、この辺りの道も懐かしい雰囲気を感じています。

この山の辺の道は多くの古代遺跡へと行く起点となつていきます。春秋の散策をお勧めします。



ガイドの育成やイベントの開催を

北房地域には多くの歴史遺産をはじめ、天然記念物の鍾乳洞、日本一を指しているホテルの保護活動、住民が取り組んでいるコスモス街道など沢山の宝が在り、これらを生かす活動が待たれています。

私たちも、真庭市や観光協会などと連携してガイドの養成や各種のイベントを通して地域の良さを発信していきたいと考えています。多くの方々の参加とご支援を期待いたします。

入会のすすめ

※ 令和四年度の会員を募集しています。私たちと一緒に北房の文化遺産を守り、素晴らしさを知らせ、次代に伝えていきませんか! 趣旨に賛同し入会を希望される方は、本会役員にお申し出下さい。年会費は、三、〇〇〇円です。令和四年度は、三年度の活動に加え、古墳の清掃や調査・研修等を計画しています。

清流の女王 時代の鮎

北房文化遺産保存会

顧問

戸村彰孝

今日、令和三年十月十六日の朝刊に来年度の高校の学科変更の記事が出た。それによると真庭高校は普通科を廃し職業系の三科編成となる。時代の流れとはいえ、七〇年前に落合高校を卒業した身には殊更淋しさが身に浸みる。鮎をよみこんだ校歌の一節が懐かしい。落合は水清き里

旭川澄みて明るく

はつらつと若鮎踊る

はつらつと若鮎のごと

睦まじく 日々に学ばむ

朗らかに 日々に鍛えむ

高等女学校から昭和二十五年新制高校として発足した時、この歌の作詩者は万葉集の研究者で校長の藤本実先生であった。当時の旭川は文字どおりの清流で竿さす釣り人の姿も珍しくはなかった。それが僅か三年後に大きな環境変化に見舞われた。旭川ダムの完成である。高二の私は友人数人

と西川にできた巨大な堰堤を見学に自転車でダム沿いの曲りくねった道を走った。児島湾から春になれば遡上していた鮎の子は道を閉ざされたのだ。

鮎遡上の道は閉ざされ、いわゆる陸封状態になったが、以後漁協の努力で琵琶湖の稚魚が放流されている。鮎も高校生も厳しい環境の変化に対応してゆかねばならないのだ。平安時代の延喜式をみる

と、当時の租税である調や中男作物、神殿の供物としての贅などには全て年魚と表記されている。アユが一年の寿命であることに由来する。

アユを鮎と表記する由来には日本書紀の神功皇后記に面白い記事がある。(五世紀頃)

「朕、西方賤の国を求めむと欲す。若し事を成すこと有らば河の魚、鉤(釣り針)飲へ」とのたまふ。因りて竿を挙げて細鱗魚を獲つ。

新羅遠征を前にして九州肥前の松浦で戦勝の可否を占ったのである。これから魚に占をつくつて鮎というようになったと伝える。ま



【神功皇后の鮎釣り】
(大日本名将鑑)

た、この故事に因んで、四月上旬になると松浦の岸辺で女性の鮎釣り姿が見られるという。

松浦川の鮎をうたった八世紀奈良時代・万葉の歌人である大伴旅人の歌を一首あげよう。旅人が九州太宰帥であつた時のものである。

松浦川 川の瀬速み
紅の裳の裾濡れて

古墳の築造年(下)

荒木山東塚古墳が築造されたであろう時代には日本に暦などなかった。したがって、考古学の世界では暦が存在しなかった時代と場所においては、独自の時間軸が必要となる。この時間軸を設定することを「編年体系の確立」という。

土器とか石器といった遺物の型式学的分類に基づいて時間経過を示すとみられる型式順にまとめ、地質学分野における層位学などの根拠等も加味しながら、その連続の新旧の方向を決定する。そして、型式相互間の共存関係などを根拠としながらその範囲を広げ、考

鮎か釣るらむ

男性の竿には鮎はかからないと云い伝える。余談ながら、中国でアユは香魚と表わす。日本でもアユの芳香を賞でて香魚ともいう共通語である。鮎と書くと中国ではナマズを指すという。鮎をとりまく人間模様を次号で少し描いてみたいと思っているがどうなるか。

古学的年代組織、すなわち編年体系が作られる。古墳時代の場合、土師器と古墳、特に前方後円墳による編年の二本立てとされている。

このように編年体系によって得られる考古学的時間尺度は、あくまでもある型式が別の型式より古い新しいかという、相対的新旧の時間差を集積したものであり、今からどれくらい前かは明言できない。このため、次にこの相対編年を絶対編年にいかに近づけるかという課題が出てくる。この対処法として、交互年代法と年輪年代学がある。前者は、既に暦が使用さ

れている地域・国との交差年代を求めるものである。後者は、遺跡から発見された木材の年輪により推定する方法である。しかし、両者ともに限界があることは明らかである。

そこに登場したのが、放射性炭素を利用した理化学的年代測定法である。一九四七（昭和二二）年、シカゴ大学の、ウィラード・リビーがこの測定法を発見した。彼はこの研究成果により、一九六〇（昭和三五）年、ノーベル化学賞を受賞している。



ウィラード・リビー
(1908 ~ 1980)

太陽からの宇宙線の影響で、大気中の窒素原子に中性子が衝突することで、炭素の放射性同位体C14（通常の炭素より少し重い炭素）が絶えず作られていて、基本的に大気中のC12（通常の炭素）との比率はほぼ一定である。このため、生きていた動植物の体内には、

C14が大気中と同じ値で保たれている。しかし、その生物が死滅すると大気中からのC14の補給がなくなり、それ以降C14は窒素に変化していき減少していく。一般に、放射性同位体が壊変してもとの量の半分になるまでの時間を、「半減期」という。C14の半減期は、約五七〇〇年である。このメカニズムを利用することで、古墳から出土した木材や骨などのC14を測定すれば、死後の経過時間がわかるという理屈である。

この方法は、開発以来様々な技術的改良が行われ、現在では少量の試料で短時間の測定が可能となってきた。また、測定結果を較正する国際較正曲線、つまり「歴史の物差し」の精度を高める努力も並行して続けられてきた。まだ様々な課題はあるものの、近年その精度は大きく飛躍してきている。

二〇一一年、国立歴史民俗博物館が、奈良県桜井市の箸墓古墳、纏向遺跡群などから出土した木材、種実、土器付着物などを対象に放

射性炭素年代測定を実施し、箸墓古墳が築造された年代を西暦二四〇〇〜二六〇年であると発表した。

二〇一八年には、名古屋大学などが纏向遺跡から出土した桃の種について同様の測定法を実施したところ、一三五〜二三〇年の分析結果が出たと発表した。

ちなみに、纏向遺跡は二世紀に突然現れて、四世紀中頃に突然消滅したとされる大型の集落群跡である。箸墓古墳は纏向遺跡箸中地区に位置し、この集落の盟主的古墳とされている。

桜井市は邪馬台国の有力候補地とされているだけにこれらの発表は大

きな話題となっただけでなく、九州説を主張する専門家らとの論争にもなった。

しかし、こうした最新の分析技術等を使用して、より確からしい絶対年代を追求する弛まぬ挑戦は、非常



【箸墓古墳】

に価値がある取組であると考える。

翻つて、北房の古墳である。以前から、これを分析したらどうだろうかと思っている遺物がある。大谷一号墳から出土した鍔型金銅製品である。金銅製品としては類例のないもので、扁平な方形板の身部に細い筒状の袋部があり、木製の柄が装着されていたと考えられている。幸い、柄の端が遺存している。これを分析することで、少なくともその木片が切られた年代が推定できる。もちろん、これによって大谷一号墳の築造年が直接推定できるわけではないが、被葬者の議論の参考にはなるはずだ。

大谷一号墳のシンポジウムで、発掘調査をされた平井勝氏は、「古墳の石室の形、墳丘の形、副葬品からおよそ七世紀後半、出土し



【鍔形金銅製品】

た須恵器から大体六七〇年から六八〇年頃に比定できるのではないか。そして、この天武朝の時期に古墳を造れる地方での階層といえ、太宰という役人しかいないことから、吉備の太宰しかいないのではないかと、被葬者を石川王と推定している。

『日本書紀』（講談社学術文庫）によれば、天武天皇元年（六七二年）の壬申の乱の際には、石川王は近江宮のある大津にいたことが推定される記述があるが、天武天皇八年（六七九年）三月九日に「吉備太宰石川王は、病で吉備に薨じた。天皇はこれを聞いてたいへん悲しまれ、恵み深い言葉を賜って云々といわれ、諸王二位を贈られた」とされていることから、平井氏が比定した古墳の築造年代とも合致する。もし、金銅製品の木片の分析結果として六七九年以前の数値が出れば、石川王の推定論拠に、科学的データによる確からしさの根拠が加わることになる。

また、定西塚古墳の石室からは、人骨、人歯、動物

骨が多数出ており、定東塚からも西塚ほどではないにしても、人骨と動物骨（特に、ニホンザルの頭蓋骨等）が検出されている。これらを分析すれば、古墳築造年に直結するデータが採取できる可能性がある。



【西塚動物骨】

さらに、今後発掘調査が実現するかもしれない荒木山西塚古墳から、何らかの遺物が出土し、それが最新の分析等に供することができるとあれば、前述の箸墓古墳の築造年代との比較も可能となり、非常に大きな成果になるであろう。

そんな期待を持ちながら、発掘すれば報告書が発行され、遺物はただ倉庫に眠る、ということでは終わるのではなく、発掘当時には叶わなかった学術的追求課題に対して、次代の最新技術によってそれが解決し、さらに新たな事実をも掘り起こしていくことを待ちながら、しっかりと保存管理すると

いうことが、「文化遺産を守る」ということの重要な意義のひとつではなからうかと考えるのである。

（平城 元）

谷尻遺跡出土「巴形銅器」の歴史的価値

四十八年前、谷尻遺跡の発掘調査から出土した巴形銅器は、現在岡山県古代吉備文化財センターに保管されている。県内では二例しかない貴重な遺物である。

巴形銅器は遺跡中最大の住居跡（三世紀中頃～三世紀末頃）の堆積土中から出土した。

半球座五脚左振りという弥生時代後期末から古墳時代初頭までの形態だが、座径指数（座径を全径で割った数値）の値から古墳時代に属するとされていた。その後出土数の増加と分類研究が進み、三世紀後半のものとしてされている。また、この銅器には有機物の付着痕跡が見られることから、例えば盾の飾り金具として装着されていたのではないかと考えられる。

さて、県内のもう一例は伝・千足古墳出土といわれる古墳時代の六点だが、明

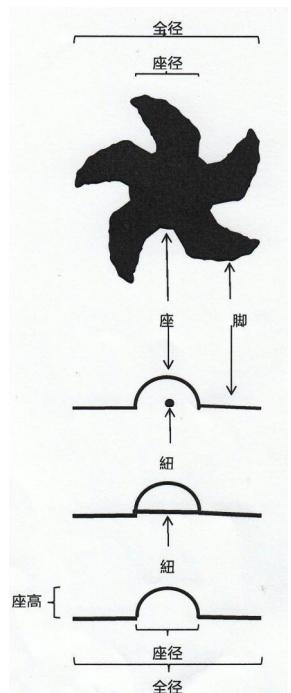
治時代の乱掘による出土品の一部と伝えられている。

したがって出土経緯が明らかなのは、谷尻遺跡出土品であり、年代も吉備国王墓である造山古墳の陪塚、千足古墳（五世紀中頃）の品より、少なくとも二〇〇年程度古いのである。

今年、古代吉備文化財センターで、谷尻遺跡出土品のレプリカを拝見させていただいた。五脚のうち三脚の先端部が欠損しており、茶錆と緑青に被われていた。しかし、当時の黄金色の輝きはないが、多くの



谷尻遺跡出土遺物
巴形銅器
（遺跡調査報告書より）



【巴形銅器の各部位】

が興味を抱くであろう形の存在感は今も衰えていなかった。

そもそも、巴形銅器は弥生後期前半（一世紀中頃）に北部九州で発生した国産青銅器であり、特徴は座が扁平・載頭または半球、脚は六脚から八脚で左振りが七割を占め、脚裏に綾杉紋や凸線凹線などが施されている。独特な型の由来は「スィジガイ」という貝を模したと言われるが、その他「ヒトデ」等の説もある。

初期の巴形銅器は、ほとんど末盧国や伊都国・奴国の王墓の甕棺に副葬または墓域内に埋納されている。その後は、山陰、北陸、中部、北関東の茨城県まで出土しているが、点在であり、地方有力部族とみられる遺跡に多い。

出土場所は土坑・建物跡・溝などで、墓域に限らず儀式用として伝世されていた可能性が高い。北部九州の有力王族が各々の勢力を拡大し誇示するため多様な形態の巴形銅器を造り、当初の副葬品から転じて、見せるための祭祀具として盾や韃（矢を入れるもの）の飾り金具として配布したのではないかと考えられる。

【巴形銅器の変遷】

器を造り、当初の副葬品から転じて、見せるための祭祀具として盾や韃（矢を入れるもの）の飾り金具として配布したのではないかと考えられる。

山陰の鳥取県では、鳥取市乙亥正屋敷廻遺跡から半球座五脚右振り、湯梨浜町長瀬高浜遺跡から半球座六脚左振りの巴型銅器が出土している。各々脚数と振りの違いはあるが、半球座という点と大きさ振り角度は谷尻遺跡出土品とほぼ同じであり、出土遺跡の年代も同時代である。

この点から、当時の北房地域の首長は、その力の大きさだけでなく、北部九州から北陸への日本海沿岸經由地の因幡・伯耆の有力首長との間に深い繋がりを持つていたと示唆される。

しかし、不思議なことに弥生時代から古墳時代までの主要地域である出雲を含む島根県での出土がない。やがて北部九州産の巴形銅器は古墳時代初頭（三世紀中頃）衰退した。しかし、再び古墳時代前期後半（四世紀中頃）近畿地方を中心として古墳に副葬され始めた。

つまり、三世紀中頃から畿内政権の勢力が北部九州まで及ぶに至り、巴形銅器も生産が縮小し衰退していった。ただ、この北部九州

産の衰退期から、畿内での再登場までの約一〇〇年間の過渡期にも、少量ながらも製造され流通した。谷尻遺跡出土品が、まさにこの時期の物とされている。過渡期品の特徴は、半球座に脚が五く六で裏面は平ら（文様なし）が主流となる。振りは不規則である。

古墳時代前期後半から中期（四世紀中頃～五世紀中頃）に至って、前方後円墳の大型化に伴う副葬品の多様化が進むと、畿内政権は過渡期の巴形銅器をもとに四脚の円錐座に定型化し、権威の象徴の副葬品の一つとして量産したと考えられる。畿内政権により作られた巴形銅器は、東は静岡県二箇所と神奈川県一箇所であり、西は千足古墳（造山古墳の陪塚）と山口県内二箇所。九州は福岡県の丸隈山古墳だけで、近畿と山陽道を中心とした首長級に配布されている。

また、政権中心地の奈良県での出土は少ないが、周辺県の首長墓（前方後円墳）かその

陪塚からの出土数が多数ある。畿内政権が掌握している勢力圏を示す。

なお、古墳期の巴形銅器が韓国東南部の大成洞古墳群の三古墳（四世紀中頃）から、倭系遺物として一〇点出土しており、近畿大和勢力との関わりを示す。この地域は後の任那と関係が深く、今後の研究が注目されている。

巴形銅器の製造と流通は、他の青銅製品（銅鐸・武器型祭器）が古墳時代を前にその祭祀具の役目を終わるのに対し、一度衰退するものの古墳時代中期前半（五世紀中頃）の大型前方後円墳の終息まで続いた。

このように、谷尻遺跡出土の巴形銅器は、我が国の古代青銅器文化の中でも特異な位置を占める遺物であり、古代北房地域の歴史的評価を考察する上でも、極めて重要な資料の一つと考えられる。改めて専門的研究を期待するものである。

（三輪能章）



西の明日香村ものがたり 観音堂の再建詳細に

宮地の湯川集落裏山の頂上あたりに昔の備中と美作の国境があり、そこに聖徳太子が開いたとされる光明山遍照寺がある。建物は落雷や戦禍により三度焼失したと言われ、江戸時代の寛文元（一六六一）年、備中松山城主水谷勝隆と作州津山城主森長継が施主となって観音堂（本堂）を再建している。

が、両氏が断絶となつて以後はそれも叶わず困っているのが近村へ命じて屋根の葺き替えができるようお願いしたい。」といったもので、宛名は井戸平左衛門（代官）となっている。

その詳細を書いた軸が同寺に残されている。軸は元々二本であった物を保存の為に一本にしてある。内容は同じであるが、一方は松山城主を先に、一方では津山城主を先に書いている。思うに松山城関係者と津山城関係者の訪問に合わせて掛け替えていたのだろう。

※井戸平左衛門（井戸正明）江戸時代中期の幕臣。享保の大飢饉の折、窮民救済のため、数々の施策を講じた。芋代官、芋殿様といわれ慕われた。（久松）

古文書の中に、遍照寺が出した屋根の葺き替えについての嘆願書が残っている。



観音堂（遍照寺）

企画展の図録・中津井の地図の完成

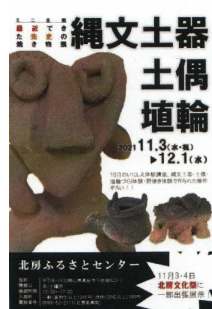
地域おこし協力隊として活動している橘高です。私は北房ふるさとセンターで歴史体験活動をして、地域の歴史活動を盛り上げたいと活動しています。

今年度は「いにしえ体験講座」という、主にモノづくりを通して歴史に関心を持ってもらい、北房の歴史や郷土にも目を向けてもらうということを目的にした講座を開催しました。対象者は、北房・真庭に住んでいる人や歴史に興味のある人で、老若男女問わず募集しました。

十月には「縄文土器づくり体験」「土偶づくり体験」「埴輪づくり体験」「野焼き・火起こし体験」という講座を開催しました。そして、参加者の皆さんが作った作品を展示した「最近でき



【野焼き】



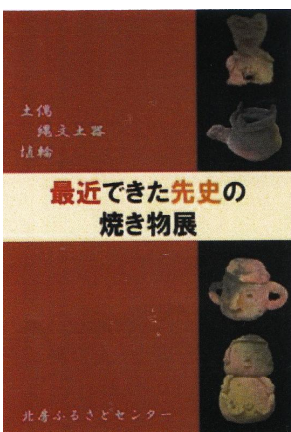
た先史の焼き物展」をふるさとセンターで開催しました。一ヶ月の開催期間の終了と同時に、このミニ企画展の図録が完成しました。

図録は、「モノづくりをした後にも、自分の作った作品を中心に興味・関心を深めることができる。参加できなかった親御さんや友達も一緒に見て楽しめる。歴史をもっと好きになってもらう」といったことを狙って作りました。内容は、作品紹介、縄文土器・土偶・埴輪などの基本情報の紹介、作品に関連した情報紹介が詰まった全二十六ページです。

また、中津井の上町・下町の町並みの地図も完成しました。

伊勢亀山藩の飛び地領として代官所が置かれ、鰯市や煙草市など多くの市が開催されていた中津井の中心地である上町・下町。そんな上町・下町の昭和三四〇年代の地元の方々に話を伺い、町並みや当時のエピソードを地図に落とし込みました。

この地図が真庭市の地域おこし協力隊が作っている冊子の付録になります。製本も終わり、配布可能となっています。地図を見てみたい、記事を読みたい、真庭にいる面白い人を知りたいという方は「Pioneer (ピオネ)」の第4号をご覧ください。こちらにも必要であれば橘高にご連絡下さい。



【ミニ企画展の図録】

(橘高七海)

蘇れ！神と仏が会える里 大御堂編

湯原の社地域には、中世の神社や御堂、石造物など数多くの歴史遺産が点在しています。また、古い形をとどめる祭や行事も残っています。

十一月十五日(土)、標記の題で社中世歴史シンポジウムが開かれました。



午前は社地域内の「式内八社と中世史跡をめぐる」史跡見学会。百万遍数珠回しが行われている寿永四(一一八五)年創建?とされる大御堂。秋の大祭で式内八社の神輿が一堂に会する神社集場。式内八社の二宮や佐波良・刑部神社など見学して回りました。それぞれの

場所では、説明板や写真を手元に地元ボランティアガイドの方の説明がありました。我々遺産保存会でも参考にしたいところです。

午後は、湯原ふれあいセンターを会場に歴史シンポジウム。蒜山郷土博物館の前原館長の「『式内八社』と中世仁和寺支配」と神戸大学の黒田名誉教授の「建築史から見る大御堂の歴史的意義」の二つの基調講演。その後、「大御堂と歴史景観」保存と地域づくり」と題した鼎談と続きました。

仏教と神道を結びつけるものとして建築された大師堂。中世惣村における典型的・代表的な惣堂と云える大御堂をめぐる歴史的景観について、堂だけでなく周辺環境一体として考える必要性があることなど学んだ一日でした。



(畦田)